

都市機能の重層段階的發展構造に関する研究

北海道大学大学院 学生員 今 尚之
北海道大学 正会員 佐藤 馨一
北海道大学 正会員 五十嵐日出夫

A Study on city function accumulative developing stage
by
Naoyuki KON, Keiichi SATHO and Hideo IGARASHI

本研究は、都市に求められる機能は、巨視的には重層段階的な發展過程をたどる法則性を持っており、その様な發展過程は人間の動機（欲求）の変化による事を論じたものである。都市機能の發展過程では、ヨーロッパの古代から近・現代までの都市に求められた機能を都市の特徴から検討を行った。その結果、都市に求められた機能が、時代と共に防衛機能から政治、經濟機能へと重層段階的に変化していることを指摘し、重層段階的な發展傾向を示すのは、人間の動機（欲求）が背景に有ることを述べている。さらに、人間の欲求は低次な欲求を満たすことにより、より高次の欲求の実現へと段階的に發展するという、マズロー（A. H. Maslow）の欲求段階説をもとに、上述の都市機能の發展過程を説明することを試みており、人間の欲求が高次化しつつある今後の土木施設整備の方針も提示した。〔都市機能・社会發展〕

1. 緒言

「神が農村を作り、人が都市を作った。」というヨーロッパの古い諺がある。この古い諺のとおり、都市は人間が作ったものであり、人間を離れて都市は成立しないであろう。そして、都市は時代と共に変化をしている。かつて人々が集い富み栄えた都市が、いまでは集う人もない石作りの巨大な建築物の残骸をさらしている例もあれば、数百万の人口をかかえ、世界の中心として繁栄している都市もある。さらには、荒野や密林の中に大規模な都市が作られたりする例もある。

さて、都市の歴史を概観すると、一つの都市が時代をこえて、単純、永続的に發展を続けてきたのではなく、古代から現代までの間には、それぞれの時代を代表した都市が存在することが見受けられる。また、都市によっては、都市に設けられる施設・設備を変化させ、さらには、都市そのものの形、機能を変えることにより時代を越えて發展し現在に至っているものも見られる。

このことに関して、例えば、今井登志喜は、西洋の都市が「幾度か發達してはまた衰え、その複雑な全過程を通じて全体として發達が見られるのである。」⁽¹⁾と指摘している。また、木内信蔵は、「都市が時代を越えて繁栄をつづけ、あるいは途中で衰退し、または復活する理由は何であったか。」などを知るために、都市についての年表から都市の發達を大きく3期に分け、それより都市化の継続性の理由を考察している⁽²⁾。さらに、矢守一彦は「巨視的に見れば、それぞれの時代には、それぞれの時代を代表する都市機能があったといえるのではないか。」⁽³⁾と時代を代表する都市機能の存在を指摘している。

これらの指摘は、それぞれの時代の人々により求められた機能を満たした都市が、その時代を代表し發展した傾向を持っていることを示しているものと思われる。したがって、都市に求められる機能の發展傾向を考察し、發展の理由を考えることは、次の時代の都市の在り方を考える上で重要なことと思われる。

本研究は、ヨーロッパの古代都市から近代都市までを対象とし、巨視的な観点から都市に求められる機能の時代による変化・發展の傾向をとらえ、都市に求められる機能が一定の方向性を持って發展していることを述べ、さらに、人間個人の心理的な發達がその様な傾向を示す理由となっていることを考察するものである。

2. 都市の起源と發達

(1) 本研究の対象

本研究では、古代から近代までのヨーロッパ都市を対象としている。これはヨーロッパの都市が、

- ① 都市の歴史が古く歴史の開幕から今日まで5千年近い歴史がある。
- ② 歴史が長いためその間の変遷が著しく、各時代で異なった都市生活の形式が現われている。
- ③ 都市そのものがただ平坦に発達してきたのではなく、また各時代の都市がそれぞれ社会生活上きわめて重要な意義を有している。

このことから、ヨーロッパの都市は、都市に求められた機能が時代により変化、発展することを考察する上で重要な示唆を与えてくれるものと考えられる。

(2) 都市の起源

都市の起源は、古代に求められている。古代において人々が都市生活を行うようになった理由については数多くの説が見られるが、大きく、軍事起源説と宗教起源説の二つに分けることができる。

軍事起源説は、イエリング (A. v. Jhering) により唱えられた説で、外敵からの生命財産の共同防御を都市の起源とするものである。また、今井は、「古代東方の人民が最初一ヵ所に集住してむしろ農牧に不便な聚落に住むに至ったのは、少なくとも共同の防御が最も重要な原因をなしたと思われる」⁽¹⁾と外敵からの共同防御(軍事)が都市の起源であると述べている。

一方、宗教起源説は、クーランジュ (F. de Coulanges) により唱えられた説である。クーランジュは、その著「古代都市」において、古代社会は聖なるものを目標としその法則に従っていた。そのため、諸制度は信仰から派生し、死者への崇拝が家族を組織し、さらにそれが都市を創造するための重大な契機になったと規定している。また、マンフォード (L. Mumford) は、「人間はただ神を崇め、神に奉仕するために作られたという信仰を表している。都市は人間のみならず全宇宙とその神々をも表す新しい”象徴的世界”であった」⁽⁴⁾と宗教的な起源についても言及している。

さて、五十嵐日出夫は「およそ神への信仰は、人間の精神あるいは肉体が、外敵の進入によって脅かされようとするときに発生し易い。神の力によって、この危険を脱し平安を得たいと願うからである。可視なるものと不可視なるものとを問わず、「生命の均衡ある発展」(五十嵐日出夫：目標設定論)を脅かそうとするものに対して、果敢に抵抗を試みる。すなわち可視の外的に対しては、城壁をめぐらし武器を執ってこれに応じ、不可視の外敵、例えば不運や病気に対しては、呪術によってこれに立ち向かう」⁽⁵⁾と信仰が不可視の外敵に対する防衛行動であることを指摘しており、宗教を起源とすることも外敵に対する防衛行動と同義と言えよう。

さらに、木内は、都市の出現を説明するのに当たって、集団の必要性、集団化の条件を明らかにする必要があるとして、集団化は、(1)外敵からの防衛、(2)政治・軍事・宗教・文化の権威を示すシンボルの建設、これらを行わせる場所の提供に有利であるなどと、水利(環境基礎)、経済(市場の成立)、軍事(防衛拠点)、宗教を都市起源としているカーター (H. Cater) の都市起源説をもとに都市の発生を説明している⁽²⁾。

以上より都市の起源として唱えられている二つの説は一つにまとめることができ、人々は都市に防衛(宗教および軍事)の機能を強く求めたものと思われる。

(3) ヨーロッパにおける古代都市の特徴

都市の起源が人々の防衛(宗教および軍事)に対する欲求であるならば、実際の古代都市は防衛(宗教および軍事)の機能を満たす施設を中心とした都市作りをしているはずである。

a) アテナイ (Athenae)

アテナイは古代ギリシャを代表するポリス (Polis) の一つである。紀元前5世紀にペルシア戦争に勝利しデロス同盟の結成と共にギリシャ第一の強国となり、ギリシャ文化の中心地となったが、紀元前4世紀にマケドニアに破れ衰退した歴史を持っている。アテナイの古代遺跡に見られるアクロポリスの丘は古代ギリシャ都市の歴史的核をなす丘で、守護神の神殿が置かれ、非常時には要塞となったものである。ここには、アテナイの守護神であるアテナに捧げられたドリス式オーダーの荘重な建築物であるパルテノン神殿が建設されるなど、市民の精神的な統合のシンボル、すなわち聖域としての機能を持つ場所であった。アテナイではこのアクロポリスの丘の南麓に下町が形成された。ギリシャ古代都市の特徴であるアゴラ (Agora) もここに設置され、軍事力と経済力とをもって、紀元前6世紀頃には周辺の小集落を結合する首都的ポリスの形態を整えていた。アテナイは、海賊の進入を恐れて海岸から約10km程内陸に作られていた。このため、アテナイの南西約8kmにあるペイライエウス (Peiraeus) に外港を築造している。紀元前5世紀のテミククレトスの治世下においては、外敵から交通路を確保するために市壁を延長し港湾を包み込み安全な港としている。

また、古代ギリシャでは植民都市が数多く作られている。植民都市の創建の手順は、まず、古式に従った神託占い（宗教）が行われ、次いで、泉水場の位置選定（給水）、外周を囲む市壁の建設（防衛）、格子状の大通りの割りつけが行われ、最後に細街路沿いの住宅が建設されたと記録されている⁽⁶⁾。

この記録やアテナイの例を見ても分かるように古代ギリシャでは、宗教および軍事すなわち防衛の機能が都市に要求されていたと言える。

b) 古代ローマ都市⁽⁷⁾

古代ローマの都市は、周りを城壁で囲み、中央にフォーラム（公共広場）を置き、東西、南北に十字型の主軸道路を切り通し、門によって外部と連絡する構造であった。さて、都市の建設は、神官による儀式の後、城壁から建設が始められ、次いでフォーラムの建設が行われた。また、立地場所としては、洪水に備え、川から離れた小高い丘が選ばれることが多かった。また、フォーラムには神殿、演壇、会議場、裁判所が置かれ、公共広場の機能と聖域としての機能が結合していた。さらに、古代ローマ都市では、浴場、競技場など市民の娯楽施設も計画的に作られた。

このように、古代ローマ都市でも、宗教および軍事の防衛機能が重要視されていた。

(4) ヨーロッパにおける中世都市の特徴

中世ヨーロッパ都市の基本3要素は「市壁」「教会」「市場」といわれている。このなかの市場要素を重要視し中世都市全体が市場であったという指摘もなされている⁽⁸⁾。確かに、中世の都市の発展に商業が果たした役割は大きく、都市の求められた機能として商業的な機能があったことは確かであろう。しかし、それ以前に安全を確保する機能が重要視されたことは見落とせない。

今井は、中世末ヨーロッパで栄えた都市が商業的要地にあったとしながらも、中世の都市が周囲に堅固な城壁をめぐらしたことにより都市がブルグ（-burg）と呼ばれたことから土地の要害が考慮されたと、安全の確保すなわち防衛機能が重要視されたと指摘している⁽¹⁾。

また、ピレンヌ（H. Pirenne）は、「商人達は、武装しないでは敢えて旅行に出なかったように、その集団居住地を様々な作り方の防塞地にした。」「従って、商人達に痛感された安全の必要が、城砦都市であるというあの中世の都市の本質的性格の説明を私達に与えてくれる。この時代に防壁の無い都市を想像することはできない。防壁は、中世都市に例外なく備わっている一つの権利、あるいは、当時の用語法を用いるならば、一つの特権である。」「⁽⁹⁾と中世の都市が、安全を確保する事を第一義として作られていることを指摘している。さらに、中世においては、治安が悪く習俗一般も粗暴であり、人々の生活は常に防衛を考えたものであったことも指摘されている⁽¹⁰⁾。このような時代では、安全に対する機能が何よりも重要視されたと見えよう。

a) ケルン（Köln）⁽¹¹⁾

ケルンはその起源をローマ時代に求める。785年以来大司教座の所在地となり以後、中世ドイツ最大の都市として栄えた。このケルンには14の修道院が置かれ、中世ケルンの文化風土はこれらの修道院によって決定付けられていたという。中世ケルンの都市形成の出発点となったのはローマ時代の城壁に囲まれた土地であった。この城壁内には何度も改築された大聖堂や二つの女子修道院などが建立された。修道院が集中したケルンであるが、12世紀前後には力を付けた商人により都市領主である大司教に対する反乱が起こされた。この反乱により1180年から1210年にかけて市の市壁が拡張され、安全な商業地域が確保された。この時市域から離れた修道院地区もこの市壁の中に取り込まれた。これは、修道院を砦とし市壁の総延長を長くしようとする軍事的な理由によるものと考えられる。

b) リューベック（Lübeck）⁽¹²⁾

12世紀に東方植民の基点として建設され、13世紀末以来ハンザ同盟の首都として14世紀から15世紀に栄えたがハンザ同盟と共に衰退した。リューベックは、ヴァーケニッツ川とトラフェ川に挟まれ、トラフェ川の河口から内陸側に18kmの位置に建設されている。これは、海上および陸上からの侵略に対する軍事的安全性の確保のためであった。さらに、バーケニッツ川には堰が作られ防衛のための幅広い堀割りも作られた。また、市庁舎、マルクト（市場広場）、都市教会堂である聖母マリア聖堂は市の中央部の丘に位置し、この丘の緩い斜面の下に船付き場が設けられていた。

c) フィレンツェ（Firenze）⁽¹³⁾

フィレンツェの起源もローマ時代に求められる。13世紀から毛織物・絹織物工業・金融業で栄えた。また15世紀からメディチ家の支配が成立し、イタリアルネサンスの中心地となった。フィレンツェでは、ローマ時代から14世紀前半までに6周の市壁が作られている。第一の市壁はローマ時代に建設された方形囲壁である。その後14世紀前半までに5周の市壁が作られている。これら6周の市壁のなかで、1284年から約半世紀にわたり、最外周に建設された市壁は、全長8.5km、塔73、市門15を備えていた。また、市壁自体の厚さは2.1m、堀は20mの規模を持ち、内外の環状道路を合わせてその幅は約41mであったという。この市壁は、同時代人から賞賛され、フィレンツェの市民の誇りであったという。また、最外周の市壁の建設と並行して、新しい大聖堂、市庁舎が建設された。大聖堂と市庁舎は都市軸を挟んで対象の位置に建設されている。これは、司教と市長の対立というより、宗教的権威と世俗的権威の双立・共存と見られている。

以上中世ヨーロッパの都市を概観したが、都市住民は、防衛施設である市壁、精神的な統合のシンボルでもある教会堂の建設、政治中心の市庁舎の建設に重きを置いていたと言える。これは、「市民は世俗的権威とそれを越えた精神的権威とによって守られる事を望み、都市は、快適、堅固、神聖であるために、市政の安寧を司る庁舎、無敵の囲壁、信仰を統括する教会堂を必要とした」⁽¹¹⁾すなわち、防衛（宗教および軍事）機能を都市に求めたことの現れでもあろう。

（5）ヨーロッパにおける近世都市の特徴⁽¹¹⁾

近世になってからは、都市は必ずしも繁栄の時期にあったのではなく、沈滞していたとする指摘が増田四郎によってなされている⁽¹²⁾。この時代は、政治史的には絶対王政、経済史的には重商主義の時代に該当し、国家権力が次第に強くなり、都市の自治権が奪われた時代である。このため、この時期に発達した都市は、国家的な意味合いを持つ都市であり、政治の中心としての首都の発達に目覚ましいものがあった。今井は16世紀から18世紀までを「首府都市の時代」と名付けている⁽¹⁾。言い換えれば、都市に政治的な機能が強く求められた時代であると言える。

さて、パリ（Paris）はこの時代を最も代表する都市として有名である。今井はパリをフランスの王権の伸長と共に発達した最も国家的な都市⁽¹⁾としている。セーヌ川の中州のシテ（Cite）島を中心にして発生したパリは、11世紀から13世紀末にかけて都市成長をしたが、ペストの流行により人口は減少し、歴代の国王はパリを逃れて郊外の田園の所領地に居城を構えるなど、17世紀のルイ14世時代まで凋落の傾向をたどっていた。ルイ14世はルーブル宮殿の建設を進めたが、単なる居城としてではなく、自己の手中に握られた国家権力を目にみえる形で表現する記念建築として意識していた。その後、コンコルド広場を含めた壮大な都市軸の建設が進められ、さらには都市施設の頂点を成すものとして凱旋門が建設された。このようにパリは、ブルボン王家以来非常に強大となったフランス王権を背景とし、政治都市として発展した。

このほかにも、ウィーン（Wien）、ベルリン（Berlin）など国家の首都として発展した都市があるが、いずれにも王権を誇示するような壮麗な宮殿などが建設された。

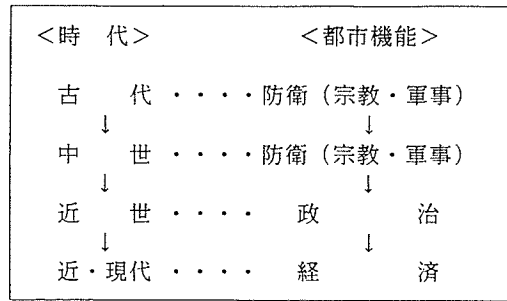
（6）ヨーロッパにおける近代都市の特徴^{(2) (11)}

近代に入ってから、産業革命によって誕生した工業都市に見られるような産業都市が、国家の中心すなわち政治中心としての首都と並ぶ程の飛躍的な発展を見た。この背景には資本家の資金・資材と労働力の獲得が存在している⁽¹²⁾。この時代を代表する都市として、ロンドン（London）があげられる。ロンドンはもとは二つの都市であった。一つはローマ時代に起源を求める商業中心地としてのロンドン市であり、もう一つは10世紀に起源を求める政治権力の座としてのウェストミンスターである。イギリスの発展と共に二つの都市は人口増加と両都市の間に設けられた法機関により一つの都市となった。したがって、近代のロンドンは政治の中心と同時に経済の中心でもあった。このため、商業的な背景を持たなかったパリを凌ぎ、19世紀に入ってから世界最大の都市の一つとして飛躍的な発展を遂げた。

近代から現代において発展した都市は、経済活動と密接に関係しており、都市に求められている機能は経済活動に対する動機を満たす機能であると言える。

（7）ヨーロッパにおける都市の発展傾向

以上において、都市に求められる機能を、古代から近代までの各時代を代表すると思われるヨーロッパ都市を例に概観した。これより、各時代毎に都市に求められた機能が存在し、それは時代とともに段階的に変化している傾向が見受けられる。



第1図 都市に求められる機能の段階的变化

3. 都市機能の重層段階的發展機構

(1) 都市機能の重層段階的發展

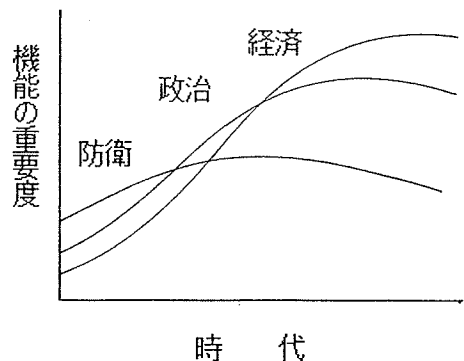
第1図に示したように、ヨーロッパ都市には古代からの各時代毎に時代を代表する、都市に求められた機能が存在している。

このように、時代を代表する都市機能が存在することについては、例えば矢守によっても指摘されている。矢守は「こころみに現代都市のあれこれを念頭に浮かべてみると、住宅都市あり、観光都市ありで機能による都市分類は高校地理の教科書なみにひろがる。しかし巨視的に見れば、それぞれの時代には、それぞれの時代を代表する都市機能があったといえるのではないか。」⁽³⁾と、都市に求められる機能が時代により異なること指摘し、さらに、古代都市では政治機能が時代を代表し、中世・近世では領主の城館および商業都市としての機能が時代を代表する。そして、近代から現代に至るまでは工業都市としての機能が時代を代表していると述べている。したがって、矢守により指摘された、時代を代表する都市機能からみた都市の変遷過程は、①政治都市→②領主城館都市および商業都市→③工業都市となる。

また、木内は都市の歴史的分類を、「Regal-ritual (政治、宗教)、mercantile (商業、植民)、industrial (工業)」の3段階としている⁽²⁾。

これらの諸説から見ても都市に求められた機能は時代によって変化、発展していると言えよう。しかしながら、①都市の起源が防衛を第一義にしていること。②古代・中世都市の作りが防衛を重要視していること。③近世に入り、政治機能が優位にある首都が大きく発展したこと。④近代以降では、経済機能が卓越している都市が世界的に発展したこと。などを考えると、都市に求められる機能から見た都市の発展過程は、第1図に示したように、①防衛 (宗教・軍事) → ②政治 → ③経済という方向性を持つものと考えられるほうが自然であると思われる。

また、さらに、都市に求められる機能は単純に段階的だけではなく重層的な発展もしていることが見られる。時代が古代・中世から近世に移り、都市に求められる機能が防衛 (宗教・軍事) 機能から政治機能へと段階的に移り変わったとしても、防衛 (宗教・軍事) 機能がまったく顧みられない訳ではない。政治機能が求められる時代であっても防衛 (宗教・軍事) 機能は必要であり、それらの機能を持った施設・設備は用意されることになる。ただし、例えば、市壁が取り払われ、環状道路が建設された例のように、以前求められた機能を果たすために準備された施設・設備が、現在求められている機能を果たすために不都合となれば、その他のものになることになる。以上のことをまとめた概念図が第2図である。



第2図 都市機能の重層段階的發展の概念

第2図において、最下層に位置する、都市に求められる機能は、防衛 (宗教・軍事) に対する機能である。例えば、城壁や宗教的施設など、可視、不可視を問わず外敵から身を守る機能を持った施設に重点が置かれている段階である。二層目に位置する機能は、政治に対する機能である。例えば、集団統合化のシンボルとなる宗教的な施設や会議場など、社会的な安定を満たすための機能を持つ施設

や、都市のシンボルとしての大きな塔や教会、豪壮な宮殿など社会的な評価に対する動機を充足させる機能を持つ施設に重点が置かれている段階である。三層目に位置する機能は、経済に対する機能である。経済活動は、金銭の貯えという安定を得ることができ、さらに社会的評価に対する動機をも満たすものである。このため、経済活動にふさわしい機能を持った施設に重点が置かれる段階と言える。

（２）人間の動機と社会の動機

都市に機能を求めるものは人間であり、都市は人間の作る社会（集団）である。したがって、人間が集団（社会）を作りその集団によって「欲求と理想との実現へ進もうとするのであって、彼は集団の内に眠っているのではなく、既に目覚めて集団を形成し統制している。」⁽¹³⁾とすれば、人間の動機（欲求）は社会の動機（欲求）と対応すると考えることもできよう。したがって、社会の要請によって生ずる都市の機能が重層段階的な発展傾向を示すことの根本には、人間の動機（欲求）が存在するものと考えられる。例えば、ハンザ貿易の中心都市として知られている中世ヨーロッパのリューベックでは貿易に必要な施設が優先的に作られている。一方、古代ローマでは民衆の歓心を買う必要から浴場や競技場などの娯楽施設が数多く作られている。これらの例は都市には人間の動機（欲求）を充足させるための施設が優先的に設置される傾向を示すものであり、人間の動機が社会の動機となりうる一例と思われる。

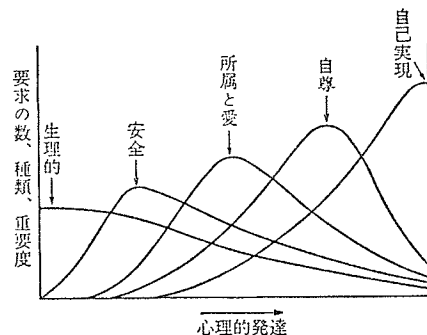
さて、社会と人間個人との関係については、自然法的な見方と有機体説的な見方の二つの極が存在する。自然法的な見方は、個人の立場から社会を見たもので、社会は諸個人の集合を待って始めて考えられるものであり、「社会は究極に於いては個人に還元され得るものである」⁽¹⁴⁾とするものである。一方、有機体説的な見方は、「社会の価値また力と呼ばれるものは個人のそれから導き出されることなくこれを優越する」⁽¹⁴⁾というものである。いずれにしても、社会と人間関係を説明するには両極の意見である。清水幾太郎は、この両極の立場は社会学にとって「決して純粋なる形態に於いてはこれを承認することが許されぬ」いものであり、「社会と個人との調和の道」を求めるものが社会学であるとしている⁽¹³⁾。また、社会学の創始者とされるコント（A. Comte）は人間精神の発展を一次的と考え社会の発展をそれに対応させていた。コントの観点は「社会の歴史は特に人間精神の歴史によって支配されるもの」であり「人間精神の歴史は凡ての歴史的研究の自然的且つ永久的な指針として見らるべきものである。」というものである⁽¹³⁾。この観点からすれば社会の動機は人間の動機をすべてではないが反映していると見なせよう。

（３）人間個人の動機の発達⁽¹⁵⁾

人間個人の欲求（動機）が段階的に変化することを理論的に整理したものとして、マズロー（A. H. Maslow）によって提唱された欲求段階説がある。欲求段階説は、パーソナリティの発達をはじめ、経営における人間観や勤労者の仕事への動機づけに関する考え方に大きな影響を与えている⁽¹⁶⁾。

さて、マズローは、人間は、人類に普遍で、明らかに不変で、発生的あるいは本能的な起源を持つ無数の欲求によって動機づけられている。という観点から人間の行動を説明している。そして、マズローの欲求段階説の特徴は、人間の欲求は階層的な秩序を保っており、低次の欲求が高次の欲求へ一段一段と満たされていくものと主張した点にある。

マズローはその欲求の段階を低次から、①生理的欲求（飢え、渇き、休息など）、②安全欲求（危険から逃れる、生命や生活の安定を求めるなど）、③所属と愛の欲求（社会的活動、友情、恋愛など）、④自尊の欲求（自我の主張、他人からの尊敬）と進むもので、まず、ここまでを欠乏動機と総称した。さらに、それらが十分に満たされると、次に来るのが成長動機と呼ばれる欲求で、段階的には、自己実現の欲求、認識の欲求、審美的な欲求へ進むとしている。なお、成長動機の3つの欲求は、⑤自己実現の欲求として一つにまとめられている。この自己実現の欲求は、自分の能力を十分出しきりたい、自分を高めたい、創造的でありたいという欲求で、精神的に最も成熟した段階であるとされている。



第3図 マズローの欲求の発達の变化的図式
(D. Krech, et al. 1962)

第3図は、マズローの欲求段階説をクレッチ（J. Krech）らが図示したものである⁽¹⁷⁾。図は、人間の欲求は一番低次の生理的欲求が満たされると次に、再び新しくさらに高次の欲求（例えば安全の欲求）が現れ、同様なことが続き欲求水準は高度化される、すなわち、人間の欲求は相対的に優位な順に一つの階層を作っていることを説明したものである。

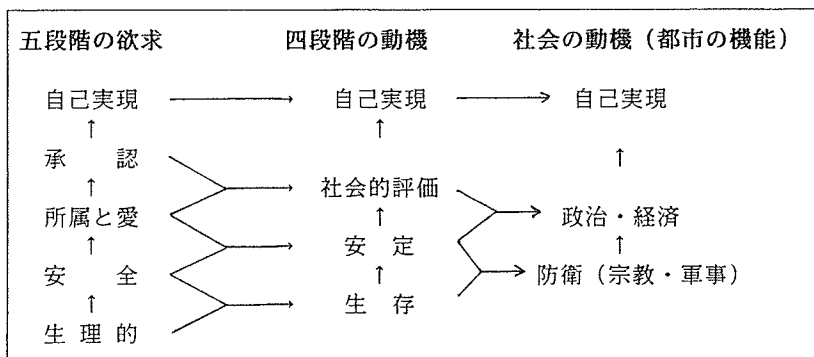
さて、このマズローの五段階の欲求（動機）であるが、①生理的欲求と②安全の欲求は、人間が生存するために欠くことのできないものに対する動機であり、(1)生存に対する動機と言い換えることができる。また、②安全の欲求の一部には安定に対する動機も含まれていると考えられる。そして、③所属と愛の欲求もまた安定に対する動機を含んでいるとも考えられる。これより二つの欲求を合わせて、(2)安定に対する動機と言えよう。この場合の安定にはいくつかの意味を含むことになるが、政治的ないし経済的な安定が大きな意味を持つものと考えられる。さらに、③所属と愛の欲求と④自尊の欲求は、社会的な評価に対する動機と考えることができ、この二つを合わせて、(3)社会的評価への動機ということもできよう。

以上よりマズローの五段階の欲求は、第4図に示すように四段階の動機（欲求）にまとめることができる。

（4）社会の動機と都市機能の変遷

社会の動機と人間の動機は必ずしも同一ではない。しかし、「（2）人間の動機と社会の動機」で述べた通り、社会が複数の人間から構成されていることから、人間の動機（欲求）が社会の動機（欲求）と対応するものとするならば、社会の動機は、生存→安定→社会的評価→自己実現という人間の動機を反映しているとも言えよう。この場合、第2図の都市に求められる機能の重層段階的發展傾向は、人間個人の動機的发展方向に対応させることができる。

さて、マズローが唱えた五段階の欲求は、四段階の動機にまとめることができる。そして、以上の観点からそれと社会の動機（都市に求められた機能）に対応させると第4図の發展過程を示すことができる。



第4図 欲求（動機）の段階

社会の發展と人間の精神の発達から法則性を見いだした例として、例えば、コントの人間精神發達の「三状態の法則（La loi des trois états）」がある。この法則は、「人間精神が神学的な状態から形而上学的な状態へて実証的な状態へと發展していくのに対応して、人間社会は軍事的な状態から法律的な状態へて産業的な状態へ發展し」現在に至ったというものである。

コントは人間の精神活動の發達を基礎とし、それを社会の發展と対応させ、この歴史的社会發展法則を通じて新しい実証的社会学を創ろうとした。このコントの観点に対しては批判も存在する⁽¹⁸⁾。しかしながら、コントの観点は社会の發展傾向を考える上で一つの手がかりを与えてくれるものである。そして、「社会が發展するときの一般的な形態と方向を史実に則して想定する」ことは歴史の理解への手がかりとなり「そのことを通じてそれへの人間の主体的な参加」⁽¹⁹⁾を進めるために必要なことである。そしてこのことは、その扱い方にもよるが、よりよい社会を創造して行く過程において必要なことであり、また十分役立つことであると考えられる。

4. 結言

本研究では、歴史学、地理学における都市史の研究結果から、都市に求められる機能が時代により変化してきたこと、およびその変化が重層段階的な発展傾向を示していることを指摘した。さらに、人間の動機（欲求）が「社会の動機」ともなりうることを考えれば、人間の動機（欲求）は都市の発展原因となりうることを述べた。そして、人間の動機（欲求）が重層段階的に発達することから、その発達過程にともなって、都市に求められる機能もまた重層段階的に変化、発展して行くことを指摘した。

現在、人々の動機（欲求）は自己実現の段階に向かっているといわれている。自己実現の概念は、「すべての行動の基礎にただ一つだけ、個人の持つ可能性をできる限り実現し発揮していこうとする積極的な衝動を仮定するもの」⁽¹⁹⁾であり、「高度に象徴的な表現手段を使った自己表現」⁽²⁰⁾である。言い換えれば、個人のより文化的な生活が重視される段階であると言える。

このように人々の動機（欲求）が自己実現の段階へと進むならば、都市に求められる機能もまた、経済的な機能から文化的な機能へと変化することになるだろう。もちろん、機能は重層段階的に変化する傾向を持つのであるから、生存、安定、社会的評価を満たす機能がしっかりと整備されていることが必要である。それらの機能を満たした上に自己実現が可能な機能を持った都市整備が今後の都市計画に必要であろう。そして、土木施設の計画に際してもまた、その視点を持つ必要があるものと考えられる。

< 参考文献 >

- ¹ 今井登志喜 『都市発達史研究』 東大出版会 1951
- ² 木内信蔵 『都市地理学原理』 古今書院 1979
- ³ 矢守一彦 『都市図の歴史－世界編－』 講談社
- ⁴ L. マフォード／生田勉訳 『歴史の都市、明日の都市』 新潮社
- ⁵ 五十嵐日出夫 土木計画学と土木史 近代土木技術の黎明期 土木学会 1983
- ⁶ J. B. ワード＝ハース／北原理雄訳 『古代ギリシアとローマの都市－古典古代の都市計画－』 井上書院 1984
- ⁷ デビッド・マコーレイ／西川幸治 『都市－ローマ人はどのように都市を作ったか－』 岩波書店 1980
- ⁸ ハワード・サルマン／福川裕一訳 中世都市 井上書院 1983
- ⁹ アンリ・ビレンヌ／佐々木克巳訳 『中世都市－社会経済史的試論－』 創文社
- ¹⁰ 堀米庸三編 『生活の世界歴史6 中世の森の中で』 河出書房新社 1991
- ¹¹ ウォルフガング・フ라우ンフェルス／日高健一郎訳 『西洋の都市－その歴史と類型－』 丸善 1986
- ¹² 増田四郎 『都市』 筑摩書房 1978
- ¹³ 清水幾太郎 『社会学講義』 岩波書店 1950
- ¹⁴ 清水幾太郎 『社会と個人』 乾元社 1952
- ¹⁵ フランク・ゴープル／小口忠彦監訳 『人間性の心理学』 産業能率大学出版部 1972
- ¹⁶ 東洋他 『心理学の基礎知識』 有斐閣
- ¹⁷ 古畑和孝他 『現代社会心理学－個人と集団・社会－』 朝倉書店 1990
- ¹⁸ 例えば、ジンメルは「社会的な発展の法則については語ることが出来ない」としている。
- ¹⁹ 庄司興吉 『社会発展への視座』 東京大学出版会
- ²⁰ 佐伯啓思 産業社会の変貌 平成3年版国民生活指標 経済企画庁国民生活局 1991